

---

# 裏切りの代償

瑠依

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

裏切りの代償

### 【Nコード】

N3576N

### 【作者名】

瑠依

### 【あらすじ】

同じ学科に所属しているそんなに仲良くもないチャラ男から、とある女にこっ酷く振られたので、その仇を取って欲しいと頼まれた拓也。

全然相手にしていなかった拓也であったが、お金を餌に釣られてしまっ。

学科内で一番の美少女と謳われる彼女を相手に、拓也は？

## 第一話 依頼

「はっ、あなたに、そんな事を言う権利があるの？」

そう言つて、嘲笑うかのように俺を見ていた君。それでも、どこか悲しそうで、今にも泣き出してしまいそうな彼女に、俺は後悔の念で胸が押し潰されそうだった。

「高田実香？」

午後十二時半。皆、午後からの活力を手に入れる為に、そこには食事を求めて多くの生徒が集まっていた。賑やかな談笑や、威勢のいい厨房のおばちゃんの声が聞こえてくる。

これは、そんなある大学の食堂での出来事。

「そう！高田実香って女なんだけどさー。」

目の前では、同じ学科に所属している佐藤秀人が、コーヒーを飲んでいた。茶髪で少し長めの髪の毛やピアスをしており、見ため通りチャラチャラしている奴である。

そんな佐藤が昼飯を奢ってくれると言うので、ノコノコと着いて来てしまった俺、近藤拓也。何か厄介事に巻き込まれそうな嫌な予感がしてきた。

「誰にも喋るんじゃないぞ。・・・実は俺、この前高田に告つたんだ。」

「へえー。」

周りを気にしながら、コソコソと話し出す佐藤。それに対して、この大学の食堂で一番高いAランチを食べながら話を聞く俺。だつて、折角奢ってくれるって言ってるんだから、一番高いやつにしないとな！というか、やべー。うまいよこれ。学食だからって侮れん。「そしたら高田の奴、この俺をふりやがったんだ！この俺をだぜ？」

どう思うよ??」

「・・・別にどうも思わないけど。ていうか自意識過剰だな、おい。まじ屈辱だ！初めてふられたぜ。」

へえ、そりゃあ貴重な体験が出来たじゃねーか。おめでとう。高田さんに感謝だな、うんうん。

「そこで、おまえに頼みがあるんだ。」

あれ、何この展開。もしかして嫌な予感的中なのか？

「高田に告って、嘘でいいからあいつと付き合ってよ。それで高田に、おまえの事メロメロにさせてから、俺が振られたみたいになんて振って欲しくない?」

「はあ?そんな酷い事、出来る訳ないだろ??それに俺に、好きでもない奴に告れってか?付き合えてか??ていうか俺、その高田って子をメロメロにさせる自信なんかないぞ。」

何考えてんだ、こいつ。そりゃあ、いくらなんでも酷くないか?まじで勘弁してくれ。

ていうか、メロメロって・・・最早死語だな!

「・・・あいつ、俺を振る時何て言ったと思う?」

俯きながら話し出す佐藤。珍しく落ち込んでいる様に見えなくもない。

「あんたみたいなの、万年発情期の猿とは付き合えない。」だぞ?!?」

ぶっ!やべ、吹き出しそうになった。いや、吹き出しそうになったんじゃないなくて、吹き出してしまった。手遅れだ。ああ!貴重なAランチがあー!!

ていうか当たってる、当たってるよ高田さん。確かにこいつって女好きだし、猿っぽい顔もしてるしな。

笑いを堪えることに、必死な俺。でもまあ、少し酷い気がするのも事実だけだな。佐藤の奴、高田さんに恨みを買っようなことでもしたんじゃないのか?

「だろー?酷いだろー!?俺の仇とってくれよー。おまえ顔はいい

んだからさー、俺の次に。」

「・・・遠い目をする俺。こいつはきつと、自分が一番可愛いんだろつな。今まで一度もふられた事がなく、自分に自信のある佐藤は、高田にふられた事が相当ショックだったのだろう。」

目がマジだ、こえーよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少し考え込む。ていうか何を真剣に考えてんだ、俺？真剣に悩むような事でもないだろ。」

「あー駄目だ駄目だ。俺そんな酷い事出来ねーし、第一面倒くさい。それに俺とおまえとじゃ、仇とつてやるほどの仲でもねーだろ？」

「へえ、奢って貰つといて、そんな事言うのか？しかも一番高いAランチ。」

うつ、こいつやっぱり、それが狙いで奢るなんて言ったのか。ニヤニヤと厭らしく笑う佐藤。まじでタチ悪いな、おい。」

「・・・解った、じゃあAランチの金は払うよ。」  
「今月すごいピンチなのに。奢って貰えるからといって、調子に乗って、Aランチなんか頼むんじゃないな。くそつ、こいつの話はもう聞かん。」

「それにタダとは言ってないぜ？」  
ピクンッ。」

俺の耳が少し動いた。しかも耳が、どこかのお笑いマジシャンのように、でっかくなってる気がするんですけども！大丈夫か、俺。」

「これでどーよ？」

そう言っただけに三本の指を見せる佐藤。三・・・三千元？

「あほつ、三万だよ。うまくやってくれたら三万やるよ。それとも三千元でいいのか？」

三万円っ！？なんちゅー金額を言い出すんだこいつは！俺とは、あまりにも金銭感覚が違いすぎる。俺は他人に、どんな理由があるうとも三万はやれない。」

「俺ん家、結構金持ちなんだよ。三万くらい別にいいさ。」

「さあ、どーする？」

そう言いながら財布から三万円を取り出し、俺の目の前でヒラヒラさせる佐藤。お札が揺れる度に、それに釣られてユラユラ揺れる俺。今月ピンチな俺にとって、はつきり言って目が離せない。三万あれば、大分助かる。

「どうする？どうするよ、俺??」

「・・・引き受けマス。」

金持ちムカつくぜ！なんて思ってしまった俺だが、お金の誘惑には負けてしまった。なんて情けないんだろう。

この時の選択が最悪の方向へ向かってく事を、まだ拓也も誰も知らなかった。

## 第二話 回想

「はあ？おまえ本当に高田実香を知らねーの??」

「知らん。」

驚きを隠さずに、少し馬鹿にしたように言う佐藤。知らないもんは知らないんだから、しょうがないだろう。

「高田実香って言ったたら、俺らの学科内で一番の美少女って評判じゃねーか。」

あー、そういえば隣で友達が、そんな事言ってたような気がする。ちゃんと聞いてなかったからなー、俺。

「おまえ、何でそんな良い顔してんのに彼女とか作らねーの？あ！もしかして、そっちの趣味があるとか？」

「あほか。」

少し冗談気味に、自らの体を抱きしめる佐藤。きもいぞ、おまえ。俺は誰かさんと違って金がねーんだよ。生活資金稼ぐだけで精一杯。彼女なんか作ったら、金が必要になってくるだろ。」

「何で？親は??」

「・・・あー、親はちよつとな。」

うちの母は、ちよつと、いやかなり変わっている。そんな母に対して、父は良識のある、まともな人なのだが。

大学入学が決まり高校を卒業して、中休みを満喫していた俺に、母はこんなことを言ったのだ。

「ねえ、拓也。一人暮らし、してみない？」

「一人暮らし？」

ニコニコと笑いながら、楽しそうに話す母さん。自分の母親のことをこう言うのもなんだが、子どもが二人もいるとはとても思えないほど、可愛らしい容姿をしている。しかし外見に騙されてはいけ

ない。彼女は二重人格者だ。俺と妹の香奈に対しては、扱いが酷過ぎる。人様には天使の様な笑顔を振り撒く癖に、俺等には悪魔の様な笑顔を振り撒く。特に父に対してのぶりっ子ぶりは凄まじいものである。たまに気味が悪くなるほどだ。

皆からも若いだの可愛いだの言われているが、本当のところ、俺は母さんの年齢を知らない。絶対に教えてくれないのだ。一体何歳なのだろう。若くて可愛いなどと言われているが、きつとすごく年をとっているに違いない。

「そう！なんと浩二兄さんが、管理しているマンションの一室を、あなたにタダで貸してくださるんですって！！」

浩二兄さんとは、俺の伯父に当たる人だ。金持ちで気前がよく、太っ腹な人なのである。

「まじで？そりゃ、してみたけど・・・」

炊事、洗濯、掃除を一人でするのは面倒だが、キャンパスライフに一人暮らしとは、非常においしい話である。何にも気がねすることなく、過ごせるであろうし。家に居たら、なにかと妹が絡んでくるしな。

「でも俺、ずっと部活しててバイトする時間なかったから、金がなによ。生活費とかは仕送りしてくれんの？」

「それに関しては大丈夫よ・・・」

「さあ、どうする拓也？」

どうするもなにも、生活費を仕送りしてくれるのならば、拒否する理由なんてどこにもない。心の中で小さくガツポーズした俺。なんか楽しそうな大学生活を、送れるんじゃないの？小悪魔な母さんからも、なにかと絡んでくる妹かも解放される。自由だ！

「いいよ。じゃあ、一人暮らしする。」

「本当に？（やったわ！これで邪魔者が一人減って、拓海さんとラブし放題。あ、まだ香奈が残ってるわね。チッ。）ウフフ、じゃあ浩二兄さんに連絡しとくわね！」

「・・・うい。」



妙な寒気を感じたが、あまり気にしないようにした。

余談ではあるが、この時部活で、バレーボールの試合の真っ只中であつた妹の香奈も、試合中寒気が止まらなかつたという。

ていうか、今になって思うが、その時の俺を全身全霊で止めたい。

そして引越し当日。ワンルームマンションではあるが、別に俺にとつては丁度いい広さ。一人分で荷物も少ないので、家族に作業を手伝ってもらい、引越しを終えた。

ひと段落つき、皆で茶を飲んでいた俺達に、母さんの爆弾発言が一つ。

「引越しが無事に終わってよかつたわ。お母さん安心しちゃつた。これからがんばって、餓死しないように生活資金を稼がなくちゃね。」

「……………」

一瞬何を言われたのか理解できなかった。父さんも香奈も同じようである。

「え？利奈。生活資金って？」

さすが年を重ねているだけの事はあり、父が一番初めに立ち直つた。ていうかそれよりも、俺も断固として父さんと同じ質問がしたい。

「え？何言ってるの拓海さん。お金を稼がなくちゃ、生活していけないでしょう？」

「いや、それはそうだけど……仕送りするんじゃないの？」

父さんの横で、人形のように何度も頷く俺。嫌な空気が流れ出している。やべえ！なんかまじで嫌な予感がしてきた。

「やだー！拓海さん。しないわよ。」

「え！でもそういう約束だったんじゃないの？拓也からは、そう聞いているけど。それに大学入ったばかりでしんどいだろうし、きちんと就職が決まるまでは援助したりさ。」

そつだそつだ！流石父さん。心の中で、精一杯声援を送る俺。て

「いつか母さん、仕送りしてくれるって言ってたじゃないか！嘘吐いたのか！？」

「仕送りするだなんて、一度も言ってないわよ。「それに関しては大丈夫」と、言ったの。あなたが働いて、生活費を稼げばいいだけのことじゃないの。」

「いや稼ぐ以前に一人暮らしをする始めには、やっぱりまとまった金が必要になつてくるでしょ？俺、金ないって言ったじゃない！母さん。」

「でも、利奈……」

「いーい？拓海さん、よく考えて。大学の授業料は、ちゃんと私達が支払うんだから。せつかく家賃がタダなんだし、生活資金くらいこの子に払って貰わなくちゃ。生活資金まで面倒見るだなんて図々しいわよ。」

「ちょっと待て。俺だって大学生活になれて金が少し貯まつたら、仕送りだつて断るつもりだったんだ。図々しいだなんて、酷いんですけど！」

「うーん……そうなのかなあ？」

「そうよ。」

母のキツイ一言。ていうか、うおいつ！父さんまで何言っちゃつてんの！？母さんの口車に、まんまと乗せられてない？

普通は、ちよつとくらい仕送りしてくれるだろ。親としてどうよ。これから新しい生活に飛び込もうとしていて、ちよつぴり不安気味の可愛い息子に対して、何とも思わないのか？それに仕送りはしないって事を、引越し前にもつとちゃんと俺に説明すべきでしょ。俺はてつきり、仕送りあると思ってたよ。早く俺を追い出したくてわざと言わなかったんだな。なんて女だ。

「じゃあ、私達は帰るから。がんばってね。」

え、もう帰るんすか？このまま帰られるのは少し、いやかなりやばい。父さんに助けて！と視線を送る。いや、ほんと助けてください。

「・・・利奈は一度言い出したら聞かないから・・・あきらめな。」  
え、まじっスか？まじっスか？？本当に、親としてそんなんでいいの？

「拓海さーん、早くーう。（フフツ、これで浮いたお金で拓海さんと旅行に行けるわぁ。）」

父の腕に自分の腕を絡ませながら、黒いオーラを放つ母。見える、見えるよあんだ。悪魔のような触覚としっば、それに翼が。黒過ぎる！

「まあ、がんばってね。お兄ちゃん。」

呆然としている俺の横を通り過ぎながら、面白そうに笑う妹。その笑顔が非常にムカついた。

「・・・おまえも大学行くんだろ？だったら高校卒業したら、きつと俺と同じ運命だな。」

咄嗟に脅してしまった俺。その言葉を聞いた途端に、青ざめる妹。ああ、俺ってば、なんて大人気ないんだ。

その後、どうしようお兄ちゃん！と泣きついてくる妹を、なんとか慰めて一日が終了。泣きたいのはこっちなんですけど。

思わず昔(?)の思い出に、一人浸ってしまった。あれからすぐにバイトを始めたが、給料が入るまでの一ヶ月間、無一文に近かった俺にとっては、地獄のようだったな。え？どう過ごしていたのかって??それは言えないな。自分でも今、よく生きていると思う。今考えると、日払いのバイトを、先にすればよかったのだ。若かったんだな、俺。おかげでバイト三昧のキャンパスライフ。

そんな俺を、佐藤が気まずそうな様子で、こちらを見ていた。

「あ、その、なんだ・・・変な事聞いて悪かったな。元気出せよ？俺なら、いつでも相談に乗ってやるからな！」

あれ、何だこの気まずい空気は。もしかして佐藤の奴、俺に親がないのではないかと、勘違いしているんじゃないか？うーん。ち

よつと一人、感傷に浸り過ぎたかなー。どうするか。

そんな俺の考えを知る由も無く、なにやら温かい目でこちらを見てくる。なんか気持ち悪い。

(・・・まあ、いつか。)

そんなに影響はないだろう。

「あ、高田実香のことは頼むぜ。それとこれとは別だ。」

「・・・うい。」

### 第三話 接触

俺はトボトボと、次の講義がある教室へと向かっていった。高田さんの件を引き受けてしまった事に、少し、いやかなり後悔し始めていた。

やばい、気が重た過ぎる。もしかして俺がこれからしようとしている事は、とてつもなく酷い事なのでは？いや、もしかしなくてもそうだ。あー、でも三万は欲しい、欲しい、欲しい……

(……ん、でも待てよ。)

俺は教室に向かう足を止めた。その時丁度、俺の後ろを歩いていた女の子がいたらしく、俺が急に足を止めたことに、とても驚いていた。すんません。

(普通に考えよう。いくら俺が高田さんの気を引こうと頑張っても、高田さんが俺の事を好きになるとは限らない。そうだよ！佐藤の話を聞く限りでは、いきなり現れて「ヘイ！ベイビー、俺と一緒にお茶でもしなあい？」なんて言うような(言うのか?)軽く振舞う俺の事を、高田さんが好きになる可能性なんて、万に一つありえねーって。ということは、こんな馬鹿みたいな茶番は、しなくてもすむ。)

俺は止めていた足を、再び教室へと動かし始めた。

(そしたら佐藤に、頑張ったんだから少しくらいカンパしろよ、と迫ればいい。丁度、俺の両親の事で勘違いしてるみたいだし。少しくらい、お金をくれるのではないだろうか。え？プライドや羞恥心はないのかって??そんなものより、今はお金の方が大切なのだ。

フフフ、高田さんを傷つけずに、お金も手に入れる。よし、その手でいこう。)

何やら少々犯罪ちつくな事を考えながら歩いていると、もう教室の前に着いてしまった。中からは、生徒の話し声が聞こえてくる。ドアを少し開け、佐藤に借りた高田さんの写真を見ながら、その本人を探す。なぜ高田さんの写真を、佐藤が持っていたのかは、あえて聞かなかった。ストーカーみたいだぞ、佐藤。ていうか今の俺の行動も、ストーカーそのものだな、おい。

そんな考えを押し殺して、静かに高田さんを探すことにした。

(あ、いた。)

高田さんは後ろの方の席に座って、携帯をいじっていた。本人を目の前にすると、また一段と気が重くなる。大丈夫かな、俺。

(・・・でもまあ、仕方がない。行くか。)

俺は意を決して、高田さんに近づいて行った。彼女に近づくと、心臓の鼓動が早くなる。落ち着くのだ、俺。しっかりしろ。

大事な第一声だ。

「隣座つてもいい？」

そう言うと、彼女はゆっくりと顔を上げた。長い黒髪に、気の強そうな瞳。第一印象は、すごく美人だと思った。こんな綺麗な子、俺には無理だろ、佐藤。

不思議そうにこちらを見上げてくる女の子、高田美香。何やら変な事に巻き込まれてしまった金

無し苦学生、近藤拓也。

はたして彼は、彼女を傷つける事なく、お金を手にする事ができるのだろうか。

彼の挑戦が、今始まる。

## 第四話 報告

き、気まずい。気まず過ぎるぞー！どうする？どうすんのよ、俺っ！？

意を決して彼女の隣に座ってはみたものの、あまりの気まずさに拓也は死にそうだった。そして「どうぞ」と、隣に座ることを許可してくれた高田さんというと、こちらには見向きもせず、ずっと携帯をいじっている。何か話しかけなければ、一向に事態が進まないのだろう。しかし、何か話しかけなければと思えば思うほど、俺の頭の中には、何の話題も浮かんでこなかった。こんな時に限って、最悪である。

（あー、なんで俺、こんな気まずいことしてんの。アホらしくなってきた。）

やはり、今からでも遅くはない。佐藤に、やっぱり止めると言いに行こうか。しかし、そう思えば思うほど、俺の頭の中では三人の諭吉さんが、笑顔でこちらに向かって手を振っている。ああ、その笑顔、爽やか過ぎ。

（大体、なんでこんなに緊張してんの。初恋の相手にドキドキしている中坊か、俺は。）

緊張しつつも妙に頭の中は冷静で、そんなことをぼんやりと考えていた。いや、初恋でも、ここまで緊張しなかったであろう。

（やっぱ、ヤマシイ考えがあるから緊張してんだろ。くそっ、これも全部佐藤の所為だ。）

佐藤の所為にしつつも（実際そうなのだが）、軽く自己嫌悪に陥り、思い切り頭を掻いてしまった。すると高田さんには、まるで不審者を見ているかのような目を向けられてしまったのだ。あぶねーあぶねー。また自分の世界に、逝っちゃうところだった。落ち着け、

俺。普通にしたらいいんだ。いつも通り、普通に。

「あ、もしかして友達と講義を受けたりする？俺が此処にいたら、邪魔じゃない??」

あー！なんてことを言ったんだ、俺。これで、もし邪魔だなんて言われたら、そこで全てが終了じゃねーか！ほんと最悪だよ。俺のお馬鹿さん!!

「あー、大丈夫だよ。この講義は、友達とつてないから。これは、いつも一人で受けてるの。」

セーフ！俺の頭の中で、諭吉さんが野球の審判のように、勢いよく両手を水平にスライドさせた。キマってるぜ、諭吉さん。カツコイイっす！

そして、高田さんが笑顔で呼びかけに答えてくれたおかげか、もう普通に振舞うことが出来るような気がしたのだ。きつと、緊張が解れた為であろう。がんばれ、俺。

「そっか、良かった。ていうか、俺の名前は知ってる？俺の名前はねー・・・」

「知ってる。近藤拓也君でしょ？同じ学科だよね??私は高田美香だよ。よろしくね。」

そう言って笑顔で手を差し出してくる高田さんに、俺は少し戸惑いを感じた。佐藤の言っていたイメージと全く違っていたからである。もつと、ツンツンしているのだと思っていた。

「よ、よろしく。」

戸惑いながらも、俺は手を差し出した。高田さんの手は、小さくてとても綺麗な手をしていた。その手の冷たさに心地良く感じながら、俺はゆっくりと彼女に笑顔を返した。

「・・・それで?」

「それで?って、何が??」

高田さんと一緒に講義を受け、そして彼女と別れた後、俺は佐藤



に無理矢理連行された。

「それで？つて、何が？？」じゃねーよ！それだけなの？二人で話をしただけ！？」

「なんだよ、文句あんのかよ。」

彼女と握手を交わしてから、俺達は色々なことを話し合った。好きな歌や好きな歌手の話、最近見た映画の話や高校時代の部活の話。この講義の講師は、頭を剃っているだけなのか、それとも、ただ単に禿げているだけなのかなどと、くだらない討議したり・・・とにかく、色々な話をしたのだ。案外、俺と高田さんは趣味が合うようで、思いのほか話が進んだのである。

「文句？あるね！大ありだよ！！お前、見かけによらず、本当にシヤイだな！シヤイボーイだよ、ほんと！！俺はもうてつきり、キスくらいしたのかと思ってたよ。」

「・・・おい。一時間半、一緒に講義を受けただけなんですけど。どこをどうしたら、キスに繋がるんですか。」

佐藤の言葉についていけない俺。ていうか、大きい声でシヤイボーイとか言うなよ。恥かしい奴だな、おい。

「何言ってるんだよ。俺だったら、軽くキスまでは行くぜ？」

「出会って90分でキス！？いや、ないないない。イタイよ、おまえ。イタ過ぎる。」

それに俺と高田さんは、同じ学科に所属しているっていうだけで、一度も話をしたことがなかったんだぜ？何でキスが出てくるの。おかしくね？？普通そういうことは、好きな者同士でやることだろ。」

「お子様だねえ、拓也君は。いいか？女なんてな・・・」

何故かいきなり女について、熱く語り出す佐藤。こいつは今までのような付き合い方してきたのだろう。ていうか、こいつと付き合ってきた女とは、どのような女なのだ。高田さんに与えられた『万年発情期の猿』の称号は、間違はなくおまえのものだ。喜ぶがいい。嘘偽りは、断じてないぞ、うん。

きつと、俺の住んでいる世界と佐藤の住んでいる世界とは、全

てにおいて次元が違い過ぎるのであろう。果てしなく別の異次元空間に存在し合い、きつと二つの世界は相塗れぬ存在なのだ。そんな風に無理やり自己完結させて、俺は佐藤という存在から意識を外した。

鳥が、あんなにも高く空を飛んでいる。平和だなあ。俺も飛び・  
・あ、俺今日バイトじゃん。

「悪いな、佐藤。俺、今日バイトだから、先帰るわ。」

俺の声が届いていないのか、尚も熱く語り続けている佐藤。もう放っておこうと、またもや勝手に自己完結させて、俺はとっとと家に帰ることにした。

ていうか何で俺は、佐藤に女について語られているのだろうか。なんか腹立つな。

## 第五話 疑問

お金の釣られてしまった俺は、本当に最低ですよね？

何故俺が、こんなにもバイトをしているのかというと、答えは簡単。ただ単純に、金を貯めているからである。いくら、生活資金を稼がなければならぬといっても、俺自身、学費と家賃は払っていない訳だから、ここまでバイトづけにならなくても、余裕で生活していけるであろう。俺が心配しているのは、大学卒業後のことである。あの母親のことだ。いつまた、あのマンションを追い出されるのか、分かったものではない。その時は、家賃も自分で払わなければならないし、引っ越しの費用だって、就職したてでは、ある筈がない。それに車だって、すごく欲しいし。とにかく金が必要なのである。

「あ、タクさん久しぶりい。」

「こんばんは。」

そんな俺はというと、居酒屋でアルバイトをしている。此処の居酒屋の制服は、黒のＴシャツに黒のズボン。それに白い、腰に巻くエプロンをしている。それだけなら問題ないが、名札があだ名で書かれている為、妙に客に覚えられてしまうのだ。しかも俺は金を稼ぐ為に、皆より多くバイトに入っている。よって、常連客には完璧に名前（あだ名）を覚えられてしまっていた。

「タク君、注文いいかい？」

「あ、はい伺います。」

そんな風に、いつも通りバイトをしていると、なにやら入り口付近で、聞き覚えのある声が聞こ

えてきた。その声に、思わず振り返る。

「あ、高田さん。」

「近藤君！」

そこにいたのは、先程まで一緒に講義を受けていた、高田さんであった。高田さんの周りには、男女問わず多くの人が集まっていた。きつと、何かの飲み会なのであろう。

そんな中、彼女はその輪を抜けて、笑顔でこちらにやって来た。

「ビックリしたー！近藤君、ここでバイトしてたんだね。」

「うん。ていうか、俺もビックリした。何かの集まり？」

「そう、サークルのね。」

高田さんは、大学のテニスサークルに所属しており、今日一緒に講義を受けた時に、それを教えてもらったのだ。初心者でも大丈夫だからと、俺にもテニスサークルに入らないかと勧誘してきたが、生憎バイトがある為に、丁重にお断りした。運動するのは好きなんだけどね。中学、高校と、サッカー部に所属してたし。

「美香！席は、こつちだよー・・・って。」

「あ、愁子。」

愁子と呼ばれた女の子が、こちらにやって来て、俺と高田さんの顔を交互に見ながら、なにやら不思議そうな顔をしている。俺も誰だか分からなかったので、高田さんに聞いてみることにした。

「この子が、社会学科の河野愁子。ほら、同じテニスサークルのメンバーの。」

「こんばんはー。」

「あ、ども。」

この子が、河野愁子さんか。実は今日、高田さんと話をしていた中で、彼女の話が出てきたのである。

「で、彼はね・・・」

「あ、解った！君、近藤拓也君でしょ？」

高田さんが俺の名前を言う前に、河野さんが突然、両手をパンと合わせた。そして、ようやく思い出したかのように、俺の名前を続けたのだ。俺は思わず、目を瞬かせる。何故、俺の名前を知ってい

るのだろうか。

「そうかー。君が、近藤君ねえ。なるほど、カッコイイじゃん。」

「・・・？なんで、俺の名前知ってんの??」

「愁子っ!」

なにやらニヤニヤしながら、一人で納得している河野さんに、高田さんが咎める様に名前を呼んだ。あれ、なんだか俺だけ蚊帳の外じゃない?

一人でポカンとしていると、高田さんが慌てて話し出した。

「なんでもないの!なんか邪魔しちゃってゴメンね、近藤君。私達、もう行くから!ほらっ、愁子

行くよ!」

「ちょ、美香ー?じゃあまたねー、近藤君。」

「あ・・・」

河野さんを引きずるようにして、高田さんは行ってしまった。そんな光景を見ながら、俺は手を上げたままの間抜けな姿で、固まっていた。

しかし「またねー」なんて、俺と河野さんの間に、そのような機会が今後あるのだろうか。

「こらあ、タク。何サボってんだー?」

「あ、すみません。」

ボーっとしていた俺は、店長に軽く喝を入れられて、仕事に戻った。高田さんの焦り具合や、河野さんの意味深な言葉に、モヤモヤとしたものを感じながら。

この時に、俺は気づくべきだったんだ。この二人のやり取りの意味に。そうすれば、まだ引き返すことが出来たのに。ただ俺は、軽はずみで鈍感で、浅はかだったんだ。

## 第六話 確認

「たーくうーやくーん。」

朝の爽やかな空気が漂う大学内を、俺は気分良く歩いていた。

俺の通っている大学は、都会の喧騒から離れた場所に建っており、空気が澄んでいるように感じられる。そこまで山奥という訳ではないのだが、なんとたまにタヌキが出現したりする。昨日深夜遅くまでバイトだった俺は眠くて仕方がないのだが、この空気を吸っているとそんなことは忘れてしまいそうである。

そう、忘れてしまいそうなのに・・・

「たーくうーやくーん！おーい、無視ですかー？」

・・・なんか今一番聞きたくない声が聞こえてきた気がする。思わず睡魔に逃げ込みたくなるような声が。いやいやいや、気のせい気のせい。きつとバイトのし過ぎで、疲れてるんだな。俺ってば、頑張り屋さん。

「たーくうーやくーん！！俺泣いちゃうよ??？」

何も聞こえない聞こえない、うん。えっと、一限目は五号館の三階か。五号館って此処から遠いんだよなあ。しかも三階だし、面倒くさい事この上ない。でもまあ、行かなきゃ講義受けられないし、しんどいけど行くとするか。

何事もなかったかのように歩き出そうとしたその時、

「拓也ー!!!」

「のあああ!？」

先程から何やら俺の隣で五月蠅かった人物が、何を血迷ったのか急に俺に抱きついてきた。

「放せ、気色悪い!」

「だって拓也が無視するからじゃん!」

頬を膨らませて文句を言う佐藤。いや、男のおまえがやっても全然可愛くないから。むしろ気持ち悪いから。

「あれえ、秀人と拓ちゃんいつの間にも仲良くなったの？」

道の真ん中で、男二人がくっ付きギヤーギヤーと騒いでいたら、それはもう目立つ事だろう。通り掛かった同じ学科の女の子が話し掛けてきた。

「あ、麻実ちゃん、今日も可愛いね。そうなんだ、拓也とは最近仲良くなつ「いや、全然仲良くなつてないから。」

即座に否定する俺。というか、挨拶代わりだと言わんばかりに女の子を褒め出す佐藤に、ある意味感心する。これがタラシのタラシたる所以か。

「そうなんだあ、すごく仲良さそうだったから。」

「全然。むしろ付き纏われて迷惑かも。」

「ひどっ！」

後ろでギヤーギヤーと文句を言っている佐藤を放っておいて、俺はお団子頭の麻実ちゃん（名前が分からなかったが、佐藤がそう呼んでいたの）と一緒に、次の講義がある五号館へと向かった。

教室へと到着した俺達は、友達の方へと向かう麻実ちゃんとは、手を振って別れた。同じ学科だからといっても人数がとても多いので、名前が分かるのは仲良くなつた人や、ちよつとした知り合いぐらいである。あとは、顔は見た事あるけれど名前は分からないなどというのが普通で・・・まあ、何故か麻実ちゃんは、俺の名前を知っていたみたいだけれども（しかも拓ちゃんて・・・）。

「で、どうなのよ？」

席に着いた俺の隣に、当然のように座った佐藤が、小さな声で話しかけてきた。何故か教室にいる皆が、こちらを見ているような気がする。こいつといると目立って仕方がないな。

「何が？」

「何がって、昨日の夜は、ちゃんとメールしたんだろうな？」

誰にですか？と一瞬考えたが、今の俺達の共通の話題といえれば、

高田さんしかいない。おそらく昨日の夜、俺が高田さんにメールをしたのかどうかを知りたいのだろう。女子か、おまえは。

「あ。」

「何々!？」

こちらに身を乗り出し、興味津々といった感じで覗き込んでくる佐藤。目が今までに見た事がないくらいに、キラキラしている。女子か、おまえは。あ、二回目。

「そういえば、昨日メアド聞くの忘れてた。」

「はあ!？」

佐藤の声が教室中に響き渡り、皆が一斉にこちらを振り向く。声がでかい。

「おまえ何考えてんの?女の子と仲良くなる為には、まずメアド聞き出す事からだろ!それを忘れてたって、おまえ・・・はあ、ダメだ。ほんと、もうおまえダメだわ。こんなにも恋愛ビギナーだとは思わなかったぜ。シャイボーイ!その顔は、見せ掛けだけか?恋愛マスターの俺だったら、昨日の夜にはとっくにもう、いだった!拓也君、何するの!？」

「悪い、ムカついた。」

マシンガントークで話し出す佐藤を、俺は無言で殴った。もう、駄目だ。こいつの発言は、全てにおいて恥ずかし過ぎる。こいつは自分で話していて、恥ずかしくないのだから。聞いているこちらの方が恥ずかしい。もう駄目、顔上げられない。

「ひどいっ!ドメスティックバイオレンス!！」

頬を押さえながら、悲痛な面持ちで叫ぶ佐藤。あー、すごいすごい。演技派男優だね。

というか、ドメスティックバイオレンスって、この前の講義で習ったばかりだろ。無駄に使ってみたかっただけだな、こいつ。

「てゆーか、おまえ、もうそろそろ違う席に行けよ。」

「へ、何で?一緒に講義受けようぜ・・・って、はっ、それとも何。そんなに俺と一緒にいるのが嫌なの!?!拓也君、ひどい!！」



「あほか。」

「こいつ、今日はもうこのキャラを通すらしい。勝手にしてくれ。」

「この講義は必須単位だから、当然高田さんも受けるだろ？まだ着てないみたいだけどな。昨日まで何も接点がなかった俺とおまえが、急に仲良くなつた姿でも見てみる。急に自分に近づいてくる俺に当然不信感を抱くだろうが。」

「な、なるほど。」

今気づきましたという顔をしている佐藤。このような感じで、こいつはこれから先、本当に大丈夫なのだろうか。

「頭いいな、拓也！・・・そっか、そうだよな。一緒にいたら、かなり怪しいよな。」

一人で、うんうんと頷いている佐藤。ちよつと怪しい。

「やっぱ、離れてた方がいいか・・・」

「じゃあ俺もう行くけど、よろしく頼むぜ、拓也。」

「・・・おう。」

そう言つて、そそくさと離れていく佐藤。それと入れ替わりに、高田さんが教室に入つて来た。危ない、危ない。間一髪である。

教室に入つて来た高田さんは、先に来て席を取っていた友人達の隣の席に座つた。姿勢が綺麗だ。こうして高田さんを見ていて、気づいた事がある。教室内にいる男達が、チラチラと高田さんの方を見ているのだ。

（確かに、綺麗だもんなあ。）

友人達と話をしている高田さんは、確かに綺麗だった。ただ綺麗なだけではなく、それとは逆に笑つた顔などは、とても可愛い。佐藤に聞いた話からでは、考えられない程である。

（やっぱり佐藤、高田さんに何かしたんじゃないか・・・）

そのような事を考えながら、高田さんの方をじつと見つめる。そんな俺の視線に気が付いたのか、高田さんがこちらを振り向いた。

（やべ。）

凝視していた事がバレてしまい、そのやましい気持ちを隠す為、

俺は笑って誤魔化した。すると高田さんは、こちらの思惑などに気づきもせずに、ニコリと笑って手を振ってくれた。それと同時に、今まで高田さんの方をチラチラと見ていた男達が、一斉にこちらを振り返ってくる。そんな光景に、内心焦りながらも、何とか手を振り返す。あいつ、高田さんとどういう関係？そのような声が聞こえてきそう、冷や汗が流れる。そんな男達からの刺々しい視線を受けながら、やはり俺は思うのだ。

（こんな綺麗な子、やっぱ俺には無理だわ、佐藤。）

## 第七話 覚悟

「はあ。」

「何、溜息吐いてんの。」

午前中の講義が終わり、食堂へとやって来た俺。隣には大学で知り合った、友人の川崎健太がおり、俺の溜息を不思議そうな顔で見つめていた。

「何でもない。」

「そうか？」

あ、そういえば、最近おまえ佐藤と仲いいよな。」

「ぶつ。」

飲んでいたコーヒートを勢い良く噴き出す俺。勿体無い！

「仲良くない、仲良くない。」

「そうか？」

そう言っつて、何事もなかったかのように、カレーライスを食べ始める健太。

（まずいな。）

噴き出したコーヒートを拭い、学食の中で一番安いうどんを食べながら、そのような事を考える。俺と佐藤は昨日知り合ったばかりだ。しかしそれを、たった一日で、周りの奴等が気づき始めている。

（健太は俺と仲がいいから、気づくのは当たり前としても、麻実ちゃんにも気づかれちゃったしなあ。）

それもこれも、佐藤が目立ち過ぎる所為だ。こんな事では、すぐにも高田さんの耳に入ってしまうだろう。どうしたものだろうか。（これからは極力、人前で佐藤と関わるのは止めよう。）

一人そう決意し、残りのうどんを流し込むように食べた。

まあ、問題は奴なだけだな。

「近藤くん！」

そう呼ばれ振り返ると、高田さんが笑顔でこちらに駆け寄って来た。いつも下ろしているサラサラの長い髪の毛は、頭の高い位置で結えられている。紺色のジャージを着て、手にはテニスラケットを持っていた。おそらく、これからテニスサークルがあるのだろう。

「これから活動？」

「うん、そうなんだ。」

いつもと大分イメージが違っており、俺は少しドキドキする。可愛いな、おい。

「そうだ！近藤君、これから暇？何か予定ある？」

「え、いや、七時からバイト入ってるけど、それまでなら暇かな。」  
今日は四限目の講義が休講だった為、まだ時間に余裕がある。現在の時刻は三時。俺のマンション、大学、バイト先、この三つは大分近い位置に立っており、移動時間もそんなに掛からない。あと三時間ちよつとは大丈夫であろう。

「じゃあ、これからテニスサークルに来ない？」

「へ？あ、いや、でも・・・」

「いいから、いいから。」

そう言っつて、俺の手を引っ張りながら、歩き出す高田さん。ちよつと待って、高田さん。周りからの視線が痛いんですけど。心なしか、殺気の混ざった熱烈な視線を感じるんですけども。

そんな視線に冷や汗を流しながら、俺は前を歩く高田さんを見て、こっと思つた。

高田さんて、案外強引なんですね。

高田さんに連れて来られた場所は、校舎から少し離れたテニスコートだった。きちんと整備されており、俺の想像以上に綺麗だった。今日はそんなに暑くもなく、きつと絶好のテニス日和なのだろう。

「あれ、マッチじゃん。どしたの。」

「あ、鈴木。」

コートの中でラリーをしていた同じ学科の鈴木が声を掛けてきた。マツチというのは、俺のあだ名で、こう呼んでくる奴は多い。近藤という苗字から、皆マツチと名付けたのであろう。安直な考えである。

「鈴木もテニスサークルに入ってたんだな。」

「おう。マツチは何、テニスサークルに入りたいの？」

「いや、俺は「私が連れて来たの。」

鈴木の問いに答えようとした俺を遮って、高田さんが俺に代わって答えた。高田さんはいつの間にか、上のジャージを脱いで、Ｔシャツ姿になっていた。その白くて細い腕に、ラケットを二本抱え込んでいる。

「今日は人も少ないし、別にいいでしょ？」

「まあ、いいんじゃないね。」

当事者の俺を差し置いて、何やら二人でどんどん話が進んでいっている。何かもう俺、参加決定になっていませんか。何も言い出せない自分が悲しい。この草食系男子！

「近藤君、私の相手してくれない？」

「いやいやいや、ちよつと待って高田さん。俺、テニス経験あんまりないよ？高校の授業で、ちよこつとやった事あるくらいで。」

いきなり何を仰います、高田さん。週に三回、テニスサークルでテニスをしている高田さんからしてみれば、俺なんか蟻んこ同然。当然、話にもなりませんってば。

「いいの、いいの。私すつごく下手で、皆の相手にならないの。だから、初心者近藤君くらいが、調度いいかなあと思って。あ、ラケットは私の予備のやつ、貸してあげるから。」

「・・・さいですか。」

少し複雑な感じがしないでもないが、高田さんと仲良くなる為には、調度いい機会なのかもしれない。これを機会に、もう少し高田さんと仲良くなってみよう。

高田さんは笑顔で俺にラケットを渡すと、腕を回しながらコートの中へと入って行った。

「鈴木、部外者の俺が参加してもいいの？」

「まあ、真面目な部活動な訳でもないし、全然構わんよ。皆、たびたび友達連れて来るしな。」

ただ・・・」

「ただ？」

少しだけ神妙な顔をして、鈴木がこちらを見てくる。その哀れむような目に、俺はとても嫌な予感がした。

「高田が男を連れて来たとなれば、サークル内、いや大学内が大騒ぎになるだろうなあと思って。」

分かる？」

「・・・分かる。」

学科内で一番の美少女と謳われる高田さん。テニスサークルに入っている事により、他の学科とも繋がりを持っている。当然、他の学科でも綺麗だと有名なのだろう。もしかしたら、高田さんは学科内で一番ではなく、大学内で一番の美少女なのかもしれない。そんな高田さんが、サークルに男を連れて来た。しかも、今高田さんは彼氏がいない。連れて来た男は、高田さんの何？もしかして彼氏なのか？そのような噂が、大学中を飛び交うであろう。そして、いずればバレルであろうその噂の原因の俺は、またあの殺気の混ざった熱烈な視線を頂戴する事になる。

（俺、こんなに波乱の人生送るような、人間だったっけ？）

平凡な男だと思っていたのに、平凡からどんどんと遠ざかっているような気がする。これから起こり得るかもしれない想像に、勝手に冷や汗を流す俺。もう駄目だ、俺のキャパ超えています。

「近藤くん、早くー！」

先にコートに入っていた高田さんが、待ちきれないかのように手を振って呼んでくる。

「大丈夫か？」

「・・・おう。」

心配そうに覗き込んでくる鈴木の気持ちをありがたく思いながら、俺は覚悟を決めた。ここまで来てしまったら、もう仕方がないだろう。行くしかないでしょう。その決意を胸に、俺はコートの中へと入って行った。

・・・なんて、少し大袈裟ですか、俺。

## 第八話 嫉妬

あれから高田さんに、打ちやすいフォームなどを教えてもらいながら、俺は何気にテニスを楽しんでた。身体を動かす事は、もと好きであつたし、久しぶりに運動が出来て、とても嬉しかったのだ。大学に入ってから、本当にバイト三昧の毎日だったしな。頑張ったよ、俺。

「お、マツチ上手いじゃん。俺と勝負しようぜ。」

高田さんと軽くラリーが出来るようになった頃、そう言って鈴木が声を掛けてきた。俺が肯定の返事をする、それを見ていた高田さんが、急にこちらを睨んでくる。

「男の子って、なんかズルイ。」

「え、何が？」

急にどうしたんですか、高田さん。俺、何か気に障るような事でもしましたか。

「だって、私がおのくらい打てるようになるまで、何ヶ月も掛かったんだよ。それが、近藤君は一時間ちよつとで打てるようになった。男の子って力があるからショットも早いし、それにコツを掴むのも早いし・・・だから、ズルイ！」

そう言つて、少し頬を膨らませて拗ねる高田さん。可愛い、すごく可愛いんだけど、いきなり俺に、そのような事を言われても、正直困る。

「まあ、マツチは特別飲み込みが早いのかもな。」

そんな俺達のやり取りを隣で見ていた鈴木が、すかさずフォローを入れてくれる。先ほどの助言といい、鈴木は結構良い奴なのかもしれない。

「それよりマツチ、早く試合するぞ。」

「近藤君。私が一生懸命教えたんだから、負けないですよ。」

真剣な表情の高田さんに、肯定の返事をしたところなんだから



ども、二人共、俺が初心者って事忘れていませんか。

鈴木と試合をしていると、コートに続々と人が集まって来た。多分、テニスサークルの他学科のメンバーなのであろう。今までコートにいたテニスサークルのメンバーは、四限目が休講になった俺達教育学部のメンバーが殆んどであった。俺が此処に着てから、一時間半くらいが経っている。おそらく、四限目を終えた他学科のメンバー達が、これからもどんと集まって来るのであろう。俺、帰った方が良くないか。

「余所見なんて、余裕だね。」

「うわ！」

周りが気になり、コートの外に目を向けていた俺に、鈴木が本気でサーブを打ってきた。何て事をするんだ、鈴木の子。もう少して、当たるところだったじゃないか。

「今、本気で打ってきただろ！俺、初心者なの分かってる！？」

「だって、余所見してるから。それに、マッチだから大丈夫。」

「何それ！」

ちよつと皆、俺への扱い酷くないか。それに、俺だから大丈夫って、どういう事だ。

「なあ、鈴木。人もいっぱい集まって来たし、邪魔になるだろ。もう俺、帰った方が良くないか？」

「駄目。」

何故駄目なんだ。それに何気に皆、俺達の試合を見ているような気がするんですけども。高田さんも真剣にこちらを見ているし、何だか俺すごく恥ずかしいんですけども。

「何、その目。俺はマッチの為を思って、言っただけなのに。」  
皆の見世物になる事の、何処が俺の為なんだ。きつとこれは、羞恥プレイの一種だ。そうに違いない。

「俺とこうして試合でもしてれば、他学科の奴らには、高田さんじ

やなくて、俺がマッチを連れて来たように見えるかもしれないだろ。

「鈴木の考えに、俺は思い切り納得した。確かに、こうして鈴木と試合をしていれば、鈴木が友達である俺を、此処に連れて来たように見えるかもしれない。そうすれば、あの例の熱烈な視線を受けなくても済むのではないだろうか。頭良いな、鈴木。」

「あーあ、マッチに疑われて、鈴木君傷ついちゃった。」

「さあ、続きしようぜ。鈴木君！」

鈴木は結構良い奴ではなく、凄く良い奴らしい。

それからしばらくして、俺と鈴木との試合は終わった。結果としては、俺のボロ負けであったのだが、鈴木が俺の打ちやすい所にボールを返してくれたり、スマッシュが打ちやすい様にロブを上げてくれたりして、俺は存分にテニスを楽しんだのだ。優しいな、鈴木。もし俺が女の子なら、絶対に惚れてるぞ。

「近藤君、お茶飲む？」

コートから出て、鈴木と共にベンチに座り込むと、俺の知らない他学科の女の子が声を掛けてきた。何故、俺の名前を知っているの  
であろう。

「あ、でも俺、部外者だし。悪いから。」

「気にしなくてもいいよ。メンバーじゃなくても、サークルに来た子は、皆飲んでるし。それに、余ったらどうせ捨てちゃうからね。」

そう言いながら、彼女は俺の隣に座ってきた。大きなタンクからコップにお茶を注いで、俺に差し出してくれる。俺はそれを受け取るうとするも、少し先に高田さんの姿が見えて、何だかとても悪い事をしている様な気分になった。

「ノンちゃん、優しいー。俺にも頂戴。」

「鈴木は分かるでしょ。自分でしなさい。」

はい、近藤君。」

「ええ、ノンちゃんのケチ。」

鈴木とノンちゃんのやり取りを遠くに聞きながら、俺は冷や汗を流した。視界の端に見える高田さんが、俺の気の所為でなければ、どんどんと機嫌が悪くなっているような気がする。黒いオーラを発しており、少し怖い。

「あ、ありがとう。」

恐る恐るといった感じで、お茶を受けとる俺を見て、鈴木が笑いながらこう言った。

「おまえら、面白いな。」

これの何処がどう面白いんですか、鈴木君。

## 第九話 喧嘩

「……高田さん。」

「……」

う、何かこれは、すごく怒っていますよね。

あれからコート内に、どんどん人が集まって来たので、やはり俺は邪魔にならないよう抜けさせてもらう事にした。すると何故だか、その事を聞いた高田さんと鈴木も一緒に抜けると言い出してきたのだ。鈴木の場合は、俺と高田さんが二人で抜け出せば、他の連中に怪しまれると思い、俺達と一緒に抜けると言い出してくれたのであろう。うん、鈴木はやはり良い奴だ。

それから車通学の鈴木とは、大学の駐車場で別れたのだが、別れる直前、鈴木は俺に意味深な視線を寄越してから去って行った。鈴木の意味深な視線が気になって仕方なかったのだが、高田さんは電車通学らしく、俺は高田さんを送る為に、二人で大学の最寄り駅へと向かっていた。俺は、大学からは徒歩で帰れるんだけどね。

そんな事よりも、この空気の重さ何なんだ。辛い、辛すぎるぞ。

「高田さん？」

俺は、この空気の重さに耐え切れずに、高田さんの名前を呼び続けるが、高田さんからの返答はない。何故、そんなに怒っておられるのでしょうか。

「高田さ「近藤君って、モテるよね。」

俺の言葉を遮り、淡々と話し出す高田さん。いきなり、どうしたというんだ。

「え、いやいやいや、全然モテないけど。」

「嘘。さっきだって近藤君の事を見ている子、結構居たし、ノンチ

やんなんて、明らかに近藤君狙いだっつし。」

ノンちゃんとは、先程お茶をくれた子の事であろう。鈴木が、そう呼んでいた気がする。

「いや、お茶くれたただだよ?」

「・・・近藤君って、結構鈍いよね。」

俺が鈍い?先程から訳も分からずに怒られ、更にそのような言葉を言われて、俺は少し頭にきたのかもしれない。一体何だということだ。

「鈍いって、俺が?というか、さっきから俺がモテるみたいな言い方してるけど、高田さんの方が全然モテてるし。」

「なっ!」

「だって、そうだろ。他学科の事はそんなに知らないけれど、教育学部の男の間では、高田さんの話で持ちきりだし。」

高田さんが顔を赤くして、こちらを睨んでくる。しかし、そのような顔も可愛いと思ってしまふ俺は、少し重症なのかもしれない。

それにしても、教育学部の男子事情を女の子に、しかも本人の高田さんに話してしまった。少し早まったかもしれない。

「そんなの知らない!それに近藤君の方が、絶対モテるよ。私の周りの子達も、近藤君の話をよくしてるし。」

「俺も、そんな事知らない。俺よりも高田さんの方が、絶対モテてるに決まってるってば。」

「近藤君の方がモテる!」

「高田さんの方がモテる!」

「近藤君!」

「高田さん!」

息を切らしながら、言い合いをする俺達。二人共、肩が上がっている。

それにしても、自分を謙遜し合いながら相手を褒めちぎる俺達は、傍から見ればすごく腹の立つ奴らに見えるであろう。ちよっと、恥ずかしい。

「・・・止めようか。」

「そうだね。」

俺の提案に、高田さんもすぐに乗ってくれた。多分俺と同じような事を考えていたのであろう。

それから気まずい雰囲気は漂う中、俺達は一言も話さずに駅に着した。このまま別れるのは後味が悪過ぎるので、俺は以前から言おうと思っていた事を、高田さんに話す事にした。

「高田さん、明後日暇だったら映画でも観に行かない？ほら、高田さんが前に見たいって言ってたやつ。」

「えっ。」

「ほら、明後日水曜日だし、女の子は安くなるだろ。講義が終わった後に、どうかなと思って。」

高田さんと初めて一緒に講義を受けた日に、映画の話になったのだが、高田さんの見たい映画が俺の見たい映画と同じだったのだ。

これは誘いの口実になるだろうと、以前から考えていたのだ。それにしても、高田さんからの返事が中々返ってこない。そんなに嫌なのであろうか。

「あ、嫌なら別にいいんだけど。」

「行く！」

俺はすかさず訂正を入れるも、高田さんはいきなり俺の手を両手で握り、そう言ってきた。高田さんの突然の行動に、少し驚く。とつか、顔が近い。高田さんの綺麗な顔が間近にあり、俺は少し動揺する。

「そ、そっか。じゃあ、講義が終わった後にでも行こうか。」

「うん。」

そう言って笑った高田さんは、とても可愛かった。

そうして色々と話をしている間に、電車が駅のホームに入ってきた。それを見た高田さんが、急に慌て出す。

「あ、電車来ちゃった。もう行くね、近藤君。今日はサークルに来てくれてありがとう。送ってもくれて。楽しかったよ、さっきはゴ

メンね。」

そう言いながら、改札口を越えて小走りになる高田さん。

「じゃあ、またね。水曜日楽しみにしてる。」

「うん、じゃあ。」

高田さんの姿が見えなくなった途端、俺は屈み込んでしまった。

高田さんの綺麗な顔を間近で見て、心臓がバクバク言っている。

「やばい。」

どうやら俺は、恋する中坊に戻ってしまったらしい。

## 第十話 緊張

はい、眠れませんでした。

今日は、高田さんとの約束の水曜日。現在の時刻は十一時で、二限目が始まったばかりである。俺は目の下に隈を作りながら、必死に眠気と戦っていた。何故、こんなに眠いのか？答えは簡単。昨日の夜、眠れなかったからです。何故、眠れなかったのか？答えは簡単。知りたいですか？正直に言いますでしょうか？ええ、いいでしょう。言ってしまうでしょう。

緊張して眠れなかったからですよ。

(やばい、眠い。)

ホワイトボードの前で講義をしている講師の声が、子守唄に聴こえてくるほど、俺は凄まじい眠気に誘われていた。昨日の夜緊張して眠れなかった分、今になって急激に眠気が襲ってきたのだ。気を抜けば、直ぐにでも意識が飛んでしまうであろう。

「どした？」

隣に座って一緒に講義を受けていた健太が、不思議そうにこちらの方を覗き込んできた。そして、俺の眠たそうな表情を見て少し驚いている。

「何、バイトか何かで寝てないの？大丈夫か？」

「いや、バイトは関係ないんだけど、ちょっとな。」

健太は俺の貧乏事情を知っているの、このように度々心配してくれるのだ。俺もたまに愚痴を零させてもらっているし、健太は本当にいい奴である。



まあしかし、今回はかりは事情が違う。言えない、言える筈がない。

高田さんと出掛けるのが楽しみで、眠れなかったなんて。

「後でノート見せてやるから、少し寝たら？」

「悪い、健太。頼んでもいいか？」

「おう、いいって。寝ろ寝ろ。」

健太の好意に甘えて、俺は机に突っ伏して寝る事にした。『恋する中坊』、眠りに落ちる前、再びそのような言葉が、俺の頭の中を飛び回っていた。

それから三限と四限も軽く眠り、本日の講義は終了となった。はいその人、寝てばかりとか言わない。しかし今日の講義中眠り続けたおかげか、今では完全に眠気は吹き飛び、気分爽快。いい感じだ、俺。せっかく高田さんと映画を見るのに、寝てしまったら最悪だしな。

高田さんとは四限目の講義が違ったので、校門で待ち合わせをしている。校門に向かって歩いてみると、少し先で女の子と一緒に歩いている佐藤が見えた。佐藤とは、あれ以来皆の前で話していない。あいつはあいつで、少しは気を使っているのかもしれない。今日高田さんと映画を観に行く事は、佐藤には昨日の夜メールで伝えてある。まあその後、何やらテンションの高いメールが返ってきたので、無視をしたのだが。

しかし、あれだけ女の子と楽しそうに歩いているのであれば、今更高田さんに復讐する必要はないのではないだろうか。そのような事を考えて佐藤を見ると、不意に奴がこちらを振り向いた。俺に気づき、少しあたふたとしだす佐藤。その後少し俯き、いきなり顔を上げたかと思うと、何かを合図するように、いきなり親指を立

ててウインクしてきたのだ。

(殴りたい。)

そんな佐藤を見て、俺は素直にそう思った。

俺が校門に到着した時には、高田さんは既に校門の前にいた。今日の高田さんは、グレイのワンピースにレギンス、首にはストールを巻いて、黒のパンプスを履いている。髪は緩く巻いており、いつも可愛いが、今日は一段と可愛らしく見える。通り過ぎる男達が、高田さんの方をチラチラと見ていた。

(あそこに行くのには、少し勇気がいるな。)

注目を集めそうだと一人悶々と考えていると、こちらに気づいた高田さんが、笑顔でこちらに駆け寄って来た。

「近藤君！」

皆の視線が集まり、少し気後れしそうになる。

「ゴメン、遅くなって。」

「ううん、そんなに待ってないから、大丈夫だよ。」

ちよつと、その女の子達、ヒソヒソ声で話さないで。男の子達は、睨まないで。

「じゃあ、行こっか。」

皆の強烈な視線には堪えるが、隣に高田さんがいる事が、とても嬉しかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3576n/>

---

裏切りの代償

2010年10月23日00時10分発行